

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26750246

研究課題名(和文) 中学校保健体育科の評価における潜在的カリキュラムと評価システム開発

研究課題名(英文) Hidden Curriculum and Evaluation System Development in Evaluation of Junior High School Physical Education

研究代表者

原 祐一 (HARA, Yuichi)

岡山大学・教育学研究科・講師

研究者番号：80550269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中学校保健体育授業における評価をめぐる潜在的カリキュラムと新たな評価システムの開発に取り組むことが目的である。研究の結果、中学校は複数クラスを体育教師が担当するため、偶発的に生まれる学びは、他のクラスと不平等になるという教師の評価に対する意識によって、学ぶべき内容は一律でなければならないという潜在的カリキュラムが明らかとなった。新たな評価システムについては、ムービーメイク評価法が開発され、子どもと教員のキー・コンピテンシーを高める可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to try to discover the hidden curriculum about evaluation and new evaluation system on physical education classes at junior high school. As a result of this research, since teacher of physical education are in charge of some classes, the hidden curriculum that the contents which children learn should be equality for them is clear because of the consciousness toward the teachers' evaluation that the learning made by chance during classes is inequality compared to other classes. Also, talking of new evaluation system, the way of evaluation by making movies is develop and can enhance key competency of children and teachers.

研究分野：体育科教育

キーワード：体育科教育 潜在的カリキュラム 評価システム

### 1. 研究開始当初の背景

今後、東京オリンピック・パラリンピックの開催と連動しながら、学校教育における保健体育授業においても社会的な期待や関心は、年々高まっていくと思われる。このような期待や関心は、子どもたちが「授業において何を学んでいるのか」といったことや教師の実践的力量的向上に向けられる。その中でも、社会的な関心が高まるにつれ、アカウントビリティへの関心が高まるため、保健体育授業における評価が必ずこれまで以上に問われるようになるであろう。つまり、保健体育科における評価においては、子どもたちが授業の中で何を学んだかを示し、社会的信頼を得るべく、いかに説明責任を果たしていくのかという「報知の機能」と、活動を修正しPDCAサイクルを生み出していく「指導改善の機能」の両面から検討していくことが重要な課題となっているのである。

これまでも、保健体育科では様々な評価方法に関する研究がおこなわれてきている。例えば、形成的授業評価(高橋ら、1994;日野ら、1996;細越ら、2000)やポートフォリオ評価(木原ら、2005;梅沢、2005;鈴木・斎藤、2007)、ゲームパフォーマンス評価(吉永ら、2004;菅沼ら、2008;鬼沢ら2008)などである。これらの評価法は、授業実践の場においても利用されており、「指導と評価の一体化(文部科学省、2001)」という課題に対して一定の効果をあげつつある。ところが、このような評価法は、かくあるべきといった当為論の視点から検討されているものが中心となっていることや、評価にかける時間が膨大になるために、実践場面において日常的に活用されにくいといった問題も生まれている。また、これらの研究の多くが、小学校の体育を対象としたものであるという特徴もある。

上記の問題を解決するためには、中学校などの校種を対象とすることと、かくあるという実態からのアプローチが求められている。それは、中学校教員が授業を行う際に背景として持っている考え方や、評価を行う際に考慮しなければならない内容を蓄積することでもある。

このかくあるという存在論の立場から検討する概念のひとつに、潜在的カリキュラムがある。この潜在的カリキュラムは、「教えた内容」と「学習によって身に付いたこと」という顕在的な対応関係以外に、普段は可視化しにくい黙示的な実際行動面での知識内容を指す。よって、評価に潜在的カリキュラムの概念を用いることは、実践行動場面において生きた知識として基礎的な資料を提供することになる。ところが、我が国では、中学校保健体育にこのような存在論の視点からのアプローチが皆無に等しい状態となっている。これまで、申請者は小学校を対象に研究を進めてきたが、教科担任制という特徴をもつ中学校については、まだ十分に検討で

きていない。中学校保健体育科の授業をよりよいものにしていくためには、評価をめぐる潜在的カリキュラムを検討することが、体育科教育研究領域においては必要度の高い研究課題になっていると考えられる。

ところで、教科担任制をとる中学校において、保健体育科を指導する教員の力量を形成することは、生涯にわたってスポーツに親しむ子どもたちを育てるために、大きな課題となっている。しかし、部活動にのみ興味関心が高い教員や、校内研究で保健体育を取り上げて授業研究をする教員が少ないことはよく知られているように、その課題解決はたやすくはない。この事態に対し、行政からの指導や数少ない研修などを通して、教育内容に関わる内容を伝達するようなアプローチが多く取られてきた。ところが、このような方法では、教員の負担感が多く、十分な成果をあげられてこなかった背景がある。つまり、目標や内容から体育を理解し、評価を行うという順序からだけでは、体育授業の指導にあまり関心のない教員に対して有効な実践的力量的形成の役割が十分に果たせていないことが読み取れるわけである。PDCAサイクルの重要性が指摘されているにもかかわらず、中学校保健体育科においてはこのサイクルを活用することによって、中学校教員自身のキー・コンピテンシーを高め、授業改善に取り組めるようにする具体的な評価システムが準備されていないのである。

### 2. 研究の目的

上記のような背景から、本研究の目的は、以下の二点について明らかにすることとした。

- (1)中学校保健体育科の評価をめぐる潜在的カリキュラムについて、「評価に影響を及ぼす要因」と「子どもにとっての評価の意味」という視点から実証的に明らかにすること。
- (2)実証的研究において明らかになったことと海外調査の結果を踏まえて、中学校教員のキー・コンピテンシーを高める評価システムを開発し、中学校の体育授業においてモデル実施することで生きた評価のあり方について提言すること。

### 3. 研究の方法

上記のような目的を立てた本研究は、修正版グラウンデッド・セオリーアプローチを用いながら、以下の3つの観点から調査研究を進め、調査ごとに研究をまとめながら進めることとした。

フィールドワーク及びフォーカス・グループ・ディスカッション

海外調査(保健体育の評価システムを先進的に研究しているイギリス)

評価システムのモデル実施検証

これらの調査結果については、常に理論化とデータ分析の往還を行うことによって研究

課題を達成していく。

#### 4. 研究成果

##### (1) 中学校保健体育科の評価をめぐる潜在的カリキュラム

###### 調査方法

中学校の保健体育授業をめぐる潜在的カリキュラムを明らかにするために、フォーカス・グループ・ディスカッションを用いることとした。教員は建前でインタビューに答える傾向が強く、普段は意識化していないことを導き出すために、この方法を用いることとした。フォーカス・グループ・ディスカッションでは、あらかじめ選定された研究関心のテーマについて焦点が定まった議論してもらい目的のために、明確に定義された母集団から少人数の対象者を集めディスカッションを行う。

よって本研究では、A 県の A 中学校の保健体育教師 3 名 (A 教諭: 40 代・女性、Y 教諭: 30 代・男性、O 教諭: 50 代・男性) と B 中学校の保健体育教師 (S 教諭: 20 代・男性、F 教諭: 20 代・男性) を対象にした。A 中学校、B 中学校の両校では、なるべく評価を正確にするよう日々の実践が行われており、教員同士も日常的に保健体育科の研究に取り組んでいるという特徴がある。

###### 潜在的カリキュラムの内容

複数のクラスに対して同じ授業を行いながら評価活動が進められる中学校体育授業において、子ども達が学び取ってしまう潜在的カリキュラムについて明らかにすることを目的としてフォーカス・グループ・ディスカッションのデータを元に検討してきた。その結果、) 評価者にクラス内の自分のポジションをいかに理解してもらうかが重要であるという潜在的カリキュラム、) 知識は言語能力だけでは評価してもらえないという潜在的カリキュラム、) 評価が決まっているからこそ指導内容が拘束されているという潜在的カリキュラムという 3 つの特徴をとらえることができた。

) 評価者にクラス内の自分のポジションをいかに理解してもらうかが重要であるという潜在的カリキュラムについては、以下のようなディスカッション内容から捉えられた。建前としては、クラスによって評価を変えることはないという発言が多くなされたが、ディスカッションを深めると、クラスによって授業雰囲気や異なり、よりよい評価を受ける子どもの割合がクラスによって変わることが語られる。つまり生徒は、ある集団内の雰囲気やその時にどのような他者が隣にいるのかといった、人間関係の影響を受けながら評価されていることが浮き彫りになった。評価の基準は変化してはならないという教師の信念とのギャップの中で、生徒は集団内における自分のポジションを教師にいかに理解してもらうのが重要であるということを知り

取っていることが明らかになった。

) 知識は言語能力だけでは評価してもらえないという潜在的カリキュラムについては、以下のようなディスカッション内容から明らかにされた。それは、体育授業は実技を伴うため、子ども達の思考や知識については、プリントやノートが用いられることが多い。しかし、教師はノートに書かれていることと授業中実際に動いている姿が乖離していることを嫌う傾向にあることが語られる。ノートにはいろいろ書かれているけれど、授業中にはそんなことを考えているようには見えない場合、よい評価はしたくないと語られる。知識についての評価は、言語能力で表現できることだけではなく、実技において暗黙裡にできていることや、それらを反映した行動をとっているかどうか外側から評価されることを学んでいることが明らかになった。

) 評価が決まっているからこそ指導内容が拘束されているという潜在的カリキュラムについては、以下のようなディスカッション内容から明らかにされた。それは、教師は多数のクラスを担当する際に、授業内容が 1 回目よりも 2 回目、2 回目よりも 3 回目になっていくにつれて上手くいくと感じている。しかし、同じ内容を教えなければならないという背景があり、悩んでいるという。それは、生徒同士がクラスを超えて情報交換をしており、何を教えてもらったかが共有されるため、テストに出す内容が先に決められていないと不平等感が出るという。ゆえに、何を評価するのかが先に決められ、それに即した形で評価されることになる。そのことによって、偶発的や派生的に学んだ内容は評価の対象にならない。よって、状況や文脈とは切り離されてしまい、場における学びが切り落とされてしまうことを学んでいることが明らかとなった。

##### (2) 中学校教員のキー・コンピテンシーを高める評価システムを開発

評価をめぐる潜在的カリキュラムを前提としながら、評価システムを開発するためには、まず理論的検討を行い、その後中学校におけるムービーメイク評価法を実際の授業で活用できるかについて検証しなければならない。また、海外調査によって海外の事例について情報を収集すると同時に、検証を深める必要がある。

###### 理論的検討

中学校の保健体育の授業を評価する際に、生徒が授業中にどのような行為を行っているのかという行為論的な理解がなければ、そこで明らかにされる評価は、状況や文脈とは切り離された、教師側の当為論的な論理から評価がなされることに繋がる。そこで、まずスポーツを社会構成主義の立場から行為論的に捉え直し、そのうえで評価をいかに考え

ばよいのかについて、検討を行った。

まず、スポーツをコトとして捉えることによって、行為者の視点を指導者がどのように引き受けうるのかについて整理する。コトの世界を捉えようとした木村(1982)によると、コトの世界は、以下のような説明になる。

『『木から落ちるリンゴ』という名詞的な言い方をする場合、それを見ている人は、自分がそこに立ち会っているという事実を消去している。自分以外のだれが見ても、『木から落ちるリンゴ』は『木から落ちるリンゴ』なのであって、それはみている人の主観にはなんの関係もなく、その人から何メートルか前方のある場所に定位可能な客観的なものなのである。客観的なもの前では、自己はその存在を隠すことができる。これに対して、『リンゴが木から落ちる』のほうは、木から落ちるリンゴと、それを見て『リンゴが木から落ちる』ということを経験している主観との両方をはっきり含んだ命題である。つまり、それを何らかの形で経験している主観なり自己なりというものがなかったならば、木から落ちるリンゴというものはありえても、リンゴが木から落ちるといふことは叙述されえない。リンゴは向う側、客観の側にあるものであるけれども、それが落ちるといふ経験はいわばこちら側、主観の側にある。あるいは、こう言ってよければ客観と主観とのあいだにある』(木村, 1982, pp. 9-10)

松田(2001)は、このような視点を踏まえたうえで、「動き」ではなく「世界」として運動を捉えることの重要性を指摘している。内山(2007)は、モノとコトが絡み合った生活世界の中であえてコトを取り出そうとする際には、いったん世界を認識的に見ることをやめて、行為的に感じなければならぬと指摘する。我々が世界に好意的に関わるとき、自己と世界のあいだの場からその行為に寄り添うように、つまり実際にスポーツをしている人に寄り添うようにある“思い”を感じながら、そのコト的世界が立ち上がる原理を探さなければならぬのである。

つまり、主客の間にコトがあり、そのコトをめぐって私たちは相互行為をしているという前提が必要になってくる。しかし、ひとたび言語化しようとするとは、モノとして変容してしまう。そのようなジレンマの中で本研究においては、行為の前提となる「本質的な問い」を共有することが解決の手掛かりになるということが導き出された。スポーツは、様々な物や他者、ルールなどが折り重なるようにしてそのコト的世界を立ち上げるわけである。その際に、問いを私たちは暗黙裡の内に設定し、それに向かって体験を積み重ねている。例えばバレーボールというゲームのコトは、ボールという物やネットという物を用いながら、自陣のコートにボールを落とさないコトが出来るかどうか、そして相手コートへ落とすために組み立てるコトが出来るかどうか、相手コートへ落とすコトが

出来るかどうかといった「本質的な問い」を内包しているものと捉えることが出来る。子ども達が、スポーツというコトにおいてプレイするとき、暗黙裡の内にこの「本質的な問い」を理解しているときにこそ、溶解体験や自己の世界を外側へ広げていく創造的な体験へと繋がっていきと考えられる。このようなスポーツ(種目や運動ごとに持っている)における「本質的な問い」を共有したうえで相互評価することによって、より新たな創造的な体験を生み出すことにつながると考えられる。むしろ、このような問いを共有していない状況であれば、それは同じ文脈にのっているとは考えることはできず、教育の非対称性をより強固にしていく。ルールや道具、場を与えればコト的世界が立ち上がるのではなく、そこにおける「本質的な問い」を共有したときにはじめて他者とともコトの世界の中でスポーツを楽しむことができるわけである。つまり、このような体験が自己教育力を高め、子ども自身が評価行為を学習行為の中に組み込んでいくプロセスへとつながると考えられる。この「本質的な問い」が行為の求心性と遠心性を持ったときにはじめて豊かなスポーツ実践が体育授業の中で繰り広げられると考えられる。

#### ムービーメイク評価法

上記のように、体育授業の中で生徒がスポーツという行為を行っているという視点を外さないように評価を行わなければならない。文脈と切り離さない形で子ども達と相互に評価がなされていくためには、従来のような外側からの観察ではとらえきれない。そこで近年、開発に伴うハード的側面は著しく進化しているICTを活用することとしたい。

従来であれば、数十万円した映像遅延装置も、現在ではフリーのものから数百円で手に入る(といっても性能はそう変わらない)ものがタブレットによって使うことが可能になっている。しかし、実際の授業場面では、子ども同士で写真や映像を撮って見合うということにとどまっており、デジタルカメラなどが普及しだしたところとICT自体の使い方はあまり変容していないのが現状であろう。そこには、従来から指摘されつつあるコミュニケーションの部分に関する新たな考え方が生まれていないことも関係しているかもしれない。つまり、体育の授業のような身体を通した直接的コミュニケーションがなされる場においては、ICTを用いるよりもより多くの情報をコミュニケーションできるといふ実態があるために、ICTの出番は限定的になっているということであろう。自らのプレイを直接見ることができないわけであるから、体育授業では、写真や動画が一役買うことは多分にある。よって、技能を向上させる場面において、写真や動画が活用されてきたわけであるが、しかし、そのような写真や動画は、その場面では活用されても、その後生かされ

ることはあまりない。

そこで、本研究ではタブレットを使った新しい評価システムを構想することとした。そのためには、前提として教員にとって時間的な負担がなるべく少なく、ICT 機器の新たな使い方を構想することによって、生徒の豊かなスポーツ実践が繰り広げられるようになることをコンセプトとしなければならない。ここで、ポイントになるのは「物語」である。「物語」とは、始点・中間点・終点を持ち、それが一つの筋によって貫かれているものである。体育の授業に引き寄せて考えるなら、その単元における始まりがあり、プレイの中での変容があり、単元の終了に伴い物語が完結（もちろん、人生においては継続する場合もある）する。もちろんこの物語は、内容と生徒と教師の相互行為によって構成されていくものであり、生涯にわたってスポーツに親しんでいく際に重要な意味を持つ。それは、子ども達が体育授業の中でスポーツ実践を行い、物語化することによって意味づけられ、経験が再構成されたものが次の行為を規定していくからである。子ども達のスポーツ「経験」を第三者が理解するためには、当事者が紡いだ物語を理解していくことが重要となるのである。

以上のことから、児童・生徒が体育授業の中でタブレットを活用し、それをムービーとして物語化していくことを課題にし、その活動を通して評価するムービーメイク評価法が開発された。

ムービーメイク評価法とは、以下のような手続きによってなされる。

- )生徒と単元を通してタブレットを用いながら写真や動画をグループで撮影してく
- )単元終了後にムービーをそれぞれのグループで作成し、提出することを課題とする。その際に、単元を通して何を評価していくのかについても共有し、動画の中に盛り込むよう指示する。
- )毎時間、メインの学習活動を妨げないように、または従来のように技能の向上をするために写真や動画を撮る。
- )授業中は、どのような写真や動画を撮るのかについてのアドバイス = 評価の観点を共有していく。
- )単元終了後に、動画を作成させる。
- )その動画を共有し、子ども達の学びを評価する。

このような手続きによってなされるムービーメイク評価法を、実際に中学校や大学の授業において実際に用い、バドミントンの授業において検証を行った。その結果、子ども達には自らの物語を最終的に作成するというモチベーションが働き、常にどのような事を学ばばよい動画が作成されるのか、今何を練習すればよいのかについて意識化された。そのことによって、教師も子ども達が何を学ぼうとしているのかについて見取ることができるようになり、授業改善へと繋がっていく

ことが示唆された。ただし、タブレットの種類によっては、動画作成中に動かなくなってしまうことが課題として挙げられ、どのようなハードを用いればよいのかについては、再検討しなければならないコトが課題として残された。

まとめ

イギリスでの評価研究についても日本と同じような評価をめぐる課題を抱えていることが調査で明らかになった。それは、評価のための授業になっていたり、評価の枠組みを作成してしまうことによって、指導が状況にあわせられないということが起こっていたりするということであった。研究的にはルーブリックを作成したりするが、実践場面ではメンターと共に振り返りをすることが多い。しかし、メンターとの評価観などが異なる中で、どのように評価をすればよいのかについては、研究課題として残されているということが指摘された。そこで、ムービーメイク評価法によって作成された動画を共有し、議論を行った。そこではこの評価システムが、ハードの面さえクリアできれば、非常に有効な方法になる可能性が確認された。イギリスでもこのような方法を取り入れて研究を進めていくことが確認された。ハード面や共同研究に関しては、今後継続的に連携をしながら進めることとなった。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6 件)

原祐二、スポーツにおける「本質的な問い」の共有と体育の評価をめぐる意味論、日本体育学会体育社会学専門領域発表論文集、査読無、24 巻、2016、pp.49-54

小副川滉太・原祐二、体育授業が苦手な教師が抱える感情経験、日本体育学会体育社会学専門領域発表論文集、査読無、24 巻、2016、pp.1-6

小田成一・原祐二、グッドルーザーを学ぶ、体育科教育、査読無、64 巻 2 号、2016、pp.52-53

原祐二、知識詰め込みから“オープンエンド”の学習へ、体育科教育、査読無、64 巻 1 号、2016、pp.32-35

原祐二、寺尾智明、挑戦課題に向かって試行錯誤し続ける卓球の授業、体育科教育、査読無、63 巻 10 号、2015、pp.50-53

原祐二、中学校保健体育授業における評価をめぐる潜在的カリキュラム、日本体育学会体育社会学分科会発表論文集、査読無、2014、22 巻、pp.55-60

[学会発表](計 7 件)

原祐二、スポーツにおける「本質的な問い」の共有と体育の評価をめぐる意味論、日本体育学会、2016 年 8 月 24 日～2016 年 8 月 26 日、大阪体育大学(大阪府)

小副川滉太・原祐二、体育授業が苦手な教師が抱える感情経験、日本体育学会、2016

年8月24日～2016年8月26日、大阪体育大学（大阪府）

宮坂雄悟、原祐一、松本大輔、木村翔太、佐藤貴浩、「スポーツ」とは何か？ - 学校体育の今後を展望するために -、日本体育科教育学会、2016年7月9日～2016年7月10日、立命館大学（滋賀県）

原祐一、体育授業を通して醸成される教師と児童の評価観と評価システム開発、日本体育学会、2015年8月25日～2015年8月27日、国土館大学（東京都）

松本大輔、原祐一、宮坂雄悟、久保明広、体育授業における「技能」と学習について - 構成主義的アプローチからの授業実践を手がかりに -、日本体育科教育学会、2015年6月20日～2015年6月21日、横浜国立大学（神奈川県）

原祐一、「学校」で「スポーツ」を教えることをめぐる潜在的機能、日本スポーツ社会学会、2015年3月22日～2015年3月23日、関西大学（大阪府）

原祐一、中学校保健体育授業における評価をめぐる潜在的カリキュラム、日本体育学会、2014年8月25日～2014年8月28日、岩手大学（岩手県）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原 祐一 (HARA, Yuichi)

岡山大学・大学院教育学研究科・講師

研究者番号：80550269

### (4) 研究協力者

木村翔太 (KIMURA, Shota)

岩永智子 (IWANAGA, Tomoko)

Len Almond

Michael J Waring

Liam McCarthy

Kath Ezzeldin

Lorraine Cale